

シャシコタン島で発見されたシジュウカラガン 記者発表 20180831 化女沼観光資料館 日本雁を保護する会 作成

# 中部千島列島シャシコタン島で初めて発見・撮影された 26羽のシジュウカラガンとその意義について

20180831記者発表用資料日本雁を保護する会作成



2018年8月31日

日本雁を保護する会（担当 吳地正行）

仙台市八木山動物公園（担当 阿部敏計）

# 【発見の意義】

- 中部千島列島シャシコタン島で幼鳥多数を含むシジュウカラガン26羽の群れが発見され撮影された（当日資料・1参照）。
- シジュウカラガンは1995年からの千島列島エカルマ島での放鳥事業（仙台市八木山動物公園、日本雁を保護する会）の成果が上がり、ほぼ絶滅していた群れは羽数回復し、越冬地の観察数は近年増加し、昨年度は5000羽に達した。
- 繁殖地の千島列島でのシジュウカラガンの情報は殆どなく、エカルマ島の北東約35kmのオンネコタン島で鳴き声や数羽の観察記録があるだけで、その解明が今後の課題となっていた。**
- 今回の観察は、**シジュウカラガンが繁殖期にまとまった群れで発見されその詳細が観察・記録された初めての事例で、シジュウカラガンの繁殖期の生態を知るうえで、非常に貴重な記録である。**

# 【発見の経緯】

- 2018年8月に、千島列島アドベンチャークルーズ（企画 西遊旅行）が行われ、カムチャツカ（ペトロパブロフスク・カムチャツキー）を起点に、中部千島南端のウルップ島までを、チャーター船（アフィナ号）で往復し、千島の自然を満喫する10泊11日のツアーが行われた（当日資料・4参照）。
- 8月11日11時頃、ゾディアックボート（複合型ゴムボート）でシャシコタン島西部沿岸をクルーズ中に、26羽のシジュウカラガンが南（シャシコタン島方向）から飛来し、その23羽がボートと島の間の海域に舞い降りたのが参加者により発見された。
- ボートがシジュウカラガンの群れに接近すると、23羽の群れは再び飛び立ち北方向へ向かった。
- この間、ボートから参加者の私市一康（きさいち かずやす）さんを背景に写真が撮影され、それを日本雁を保護する会に提供していた。

# 【発見の経緯】

- この情報はチャーター船のクルー（Nikolay Pavlov氏）を通じて、シジュウカラガン・プロジェクトのロシア側責任者のNikolay Gerasimov博士に届き、寄港後に博士と観察者の情報交換も行われた。



# 資料・4) 千島アドベンチャークルーズ移動経路



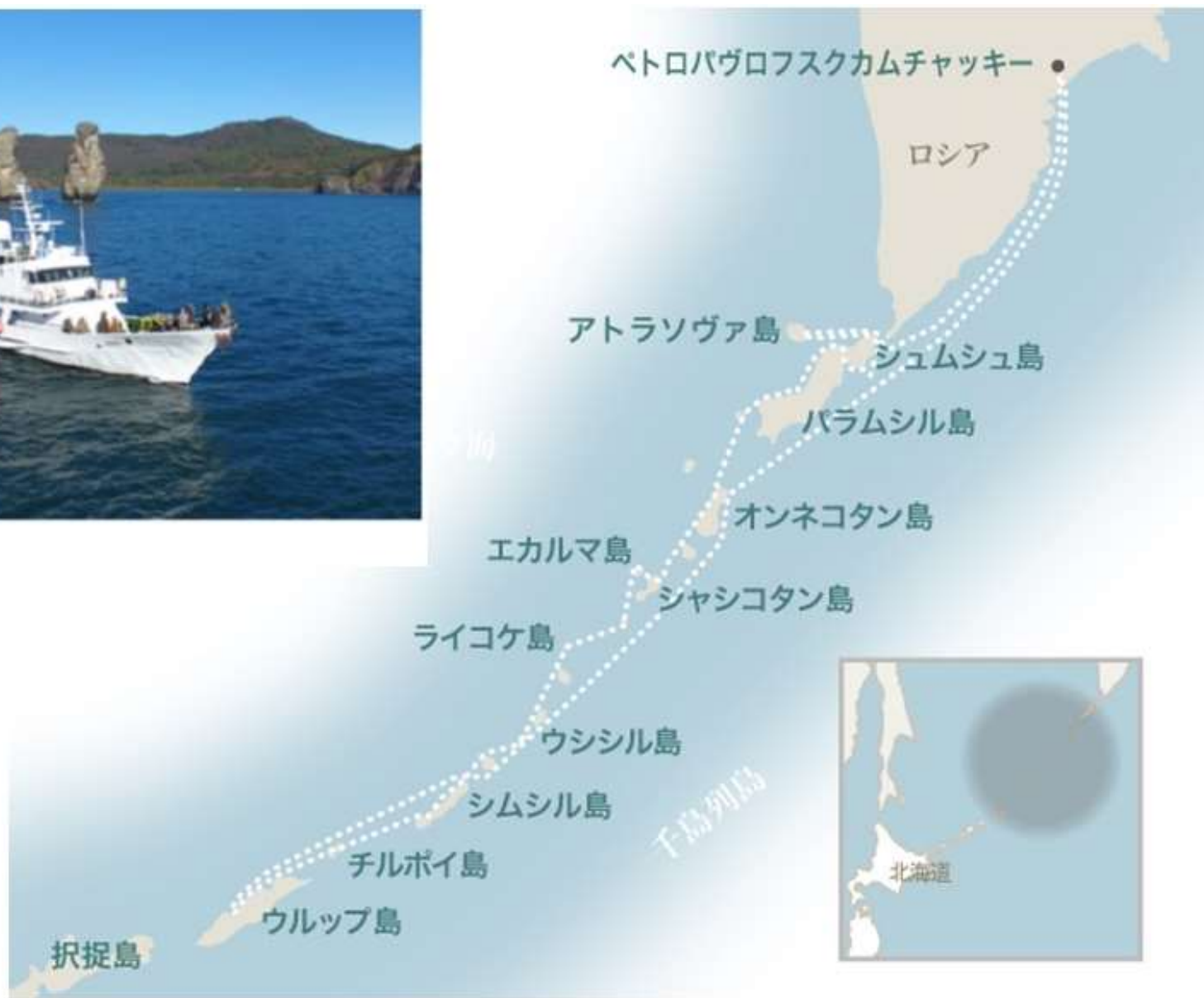
野生動物を観察



アフィナ号 AFINA



ゾディアッククルーズ



**千島列島アドベンチャークルーズ**  
カムチャッカ半島から千島列島へ 西遊旅行のチャーター船利用で巡る日本初となる特別企画

# 資料・1) -1

## シジュウカラガンの群れが発見された中部千島シャシコタン島の位置



## 資料・1) -2

### シャシコタン島でのシジュウカラガンの発見地点とその行動

#### シャシコタン島-シジュウカラガン 観察地点

2018年8月12日11時頃シャシコタン島西部沿岸海上をゾディアックボートで観察中に、26羽のシジュウカラガンが観察、撮影された（私市一康さん）。

23羽と3羽の2群に別れ、3羽の群れは見失ったが、23羽はポートと島の間の海へ降りた。

写真から成鳥、幼鳥が分かるものを抽出し、幼鳥比を算出した。



Google Earth

Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO

Image © 2018 DigitalGlobe

Image Landsat / Copernicus

10 km

# 資料・1) -3

## シャシコタン島で発見・撮影されたシジュウカラガンの群れ



写真・情報提供；私市一康さん



ロシア側のスタッフのニックさんはゲラシモフ博士の知り合い。シジュウカラガン発見の知らせをニックさんから受け取ったゲラシモフ博士は寄港後ホテルで関係者から聞き取り。



ゾディアッククルーズ

観察用のゾディアック（ボート）から群れを観察した。







写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん





写真撮影：私市一康さん



写真撮影：私市一康さん

# 【発見の意義】

●撮影された写真を詳細に検討した結果、この群れの**4割以上がその年生まれの幼鳥**であることが分かった（当日資料・2参照）。

このことはこれらの**シジュウカラガンが、中部千島列島で確実に繁殖を行っていることを示す初めての証し**で、将来実施が検討されている千島列島の繁殖地調査計画策定にとっても重要な情報となる。



写真撮影：私市一康さん



幼鳥

幼鳥

幼鳥

幼鳥

成鳥

幼鳥

幼鳥

成鳥

幼鳥

成鳥

## 資料・2) 発見されたシジュウカラガンの成鳥・幼鳥構成

シャシコタン島で観察されたシジュウカラガン26羽の成幼比率（写真からの推定）

写真 #	群れの全数 c)*	写真の全数 d)	識別率		幼鳥**と 成鳥と確 認できた 個体(a) (b)			幼鳥比*** (b)/[a+b]	備 考
			群れ全数 [a+b]/c)	写真全数 [a+b]/d)					
3191	23	23	0.52	0.52	5	7	0.58	海面	
3211	23	23	0.52	0.52	7	5	0.42	海面	
3218	23	23	0.70	0.70	8	8	0.50	海面	
3240	23	23	0.57	0.57	8	5	0.38	海面	
3247	23	19	0.52	0.63	4	8	0.67	飛翔	
3250	23	15	0.39	0.60	7	2	0.22	飛翔	
3254	23	16	0.43	0.63	6	4	0.40	飛翔	
3259	23	17	0.65	0.88	11	4	0.27	飛翔	
3260	23	16	0.52	0.75	8	4	0.33	飛翔	
3261	23	16	0.57	0.81	9	4	0.31	飛翔	
3266	23	14	0.52	0.86	6	6	0.50	飛翔	
3274	23	12	0.43	0.83	7	3	0.30	飛翔	
3287	23	15	0.57	0.87	5	8	0.62	飛翔	
3295	23	20	0.30	0.35	2	5	0.71	飛翔	
<b>total</b>	<b>322</b>	<b>252</b>	<b>0.52</b>	<b>0.66</b>	<b>93</b>	<b>73</b>	<b>0.44</b>	<b>識別できた個体の延べ数</b>	
							10.11	23羽とは別の3羽を含めると、 群れの推定構成 = 成鳥 (13羽) + 幼鳥 (10羽) + 不明 (3羽) = 26羽	

注\* = 別群の3羽を除く

注\*\* = 白い首環がない個体を"幼鳥"としたが、成鳥でも首環がない個体が一定割合いるのでやや過大評価になっていると思われる。

注\*\*\* = 今後の課題に書いたが、これらが全て今年生まれの幼鳥かどうか、八木山動物公園に問合せし確認する必要がある

# 幼鳥の比率、群れの構成

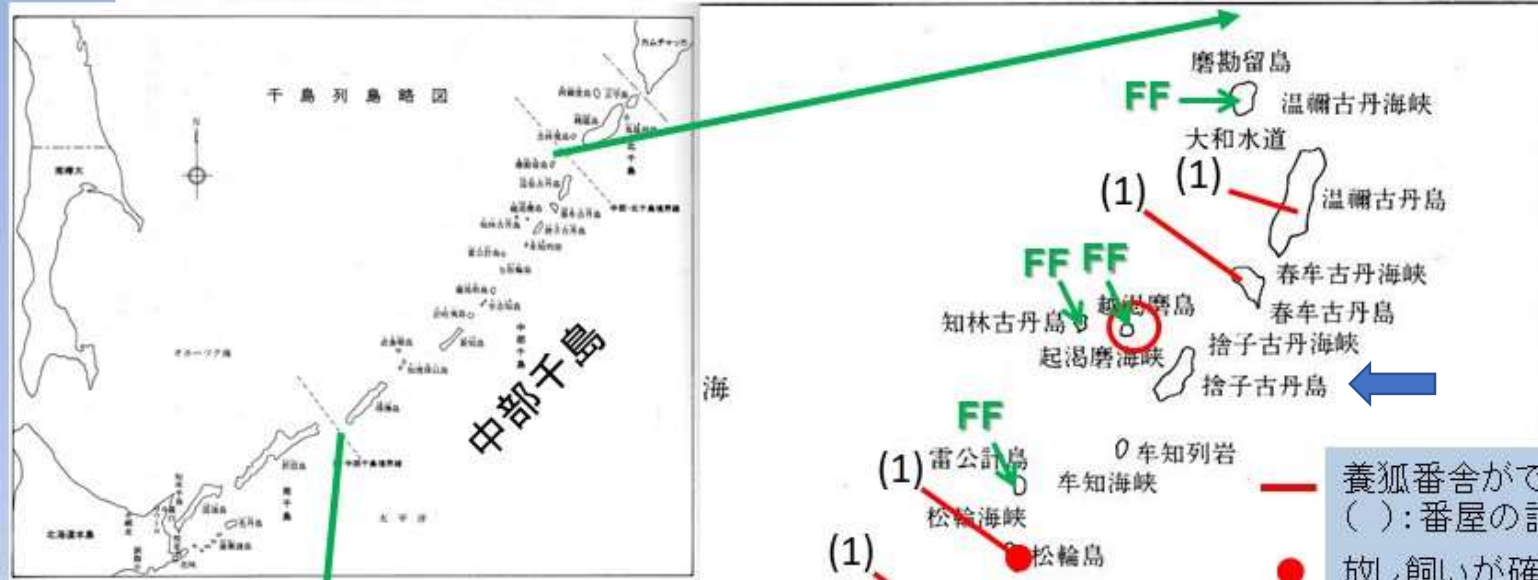
- **幼鳥比**：写真から識別できる成鳥（白首輪あり）、幼鳥（白首輪なし、雨覆いの羽縁の白線が波打っている）の比率を調べたところ、0.44となった。
- このことから[23羽の群れの構成] = 成鳥13羽、幼鳥10羽となる。
- この中には少なくとも2または3家族が含まれていると思われる。
- 3家族とすると家族群の親鳥は最大6羽となり、残りの7羽の成鳥は非繁殖鳥（前年生まれの若鳥）の可能性が高い。別群の3羽は群れ構成は不明。

## 【発見の意義】

●シャシコタン島は1995年から2010年までシジュウカラガンの放鳥が行われたエカルマ島の南東約6kmに位置した無人島である。20世紀初頭に、当時日本領だった中部千島の多くの島では国策で多数のキツネが毛皮採取の目的で放飼された。それがシジュウカラガンを絶滅に追いやったが、シャシコタン島ではキツネ放飼は行われていない（当日資料・3参照）。



# 資料・3) 中部千島列島でキツネ放飼が行われていた島



— 養狐番舎ができた島の  
 ( ): 番舎の設置地点数  
 ● 放し飼いが確認されている島 (大正5年〜)<sup>2,3)</sup>  
 ○ かつてシジュウカラガンの繁殖が確認されている島<sup>4)</sup>  
 FF かつて野生のアカギツネ *Vulpes fulvius* がいないことが確認されている島<sup>4)</sup>

注1): 海軍省水路部刊行「千島列島水路誌」(昭和12年3月刊)による  
 注2): 「毛皮動物」(北海タイムス紙, 昭和56年5月19日号)による  
 注3): 懐かしの千島(p171)には、「新知島の武魯頓湾以外ではみな放し飼いの記載あり」  
 注4): Snow, 1897. Notes on the Kurile Islands  
 注5): 農商務省/農林省 (当時)

**国策で<sup>5)</sup>キツネ養殖(放飼)事業が行われた島**

「写真集 懐かしの千島(昭和56年)より